

【A13】

内省といかに向き合うか

—日本語(母語)・富山県井波方言(母方言)・中国語(非母語)—

井上優 (日本大学)

文法形式の意味の研究は「内省の活性化と構造化」の作業である。母語でなくても、自分の母語を媒介として疑似的な内省は構築できる。内省の活性化(観察)においては、分析対象について、使用場面や話し手の気持ちをリアルに内省する(母語の場合)、あるいはリアルに推測して母語話者に確認する(非母語の場合)。内省の構造化(分析)においては、断片的な内省の根底にある基本的意味を考え、それに基づいて内省を整理する。観察と分析は表裏一体であり、リアルな内省(詳細な観察)は基本的意味を見えやすくし、直感的にイメージしやすい説明(妥当な分析)は内省の活性化を促進する。観察・分析の際は、①わかりやすい例を中心に、いろいろな言い方で意味を説明してみる、②基本的意味を考えたら、ぶれずにいろいろな例にあてはめてみる、③どこにあるかわからないヒントを見逃さない、④他者の内省にふりまわされないことが重要である。

【B13】

古典文学作品における日本語学と文学の接点

鴻野 知暁（大阪大学）

古典文学作品のテキストを正確に解釈し理解するということを目的とし、「当該箇所と類似の表現を探す」という手法を提示する。『源氏物語』における「連体修飾句＋体言」という表現を取り上げ、どのような解釈上の問題点が生じるか、そして、それをどのように解決したらよいかについて考える。まず、連体修飾句を解釈する際の注意点について先行研究に従いつつ必要なところを紹介し、解釈の曖昧性につながる単語の多義性について、辞書的意味を確認する。続いて、語学的に妥当な解釈を決定できない場合、類例を探し、それらが共通して使用されている文脈・場面を考えることで、正しい解釈は何であるか検討する。これは日本語学研究者も文学研究者も容易に実践でき、多くの場面で有効である。高等学校教育、大学教育の現場への応用可能性についても述べる。